

私の最推しとの甘い結婚生活

玄野クロ

Kuro Kurono



Eternity
BUNKO

目次

私の最推しとの甘い結婚生活

5

書き下ろし番外編

二人だけのウェディングプラン

323

私の最推しとの甘い結婚生活

1 会社の顔と家の顔

「櫻井さん、これどうにか通せないかな……?」

「うーん、ごめんなさい。いくら課長の頼みでも、こればかりは……」

「そこを何とか! 今日受理されないと、今月の経費に含まれないでしょ? 来月は結構な出費があつてさ……」

「お金が関わつてくるので、課長の印がないと受理できないですよ」

「総務に置いてないの?」

「……珍しいですからね、課長の名字。残念ながら、置いてないです」

「あああ! そんなあ……」

「はあ……はいはい、櫻井さんが困っているでしょう? お話なら私が聞きますよ?」

「うう……大丈夫です……明日出します……」

「それなら最初からそうしてくださいね? 余計な仕事を増やさない!」

「は、はいっ……!」

はあ、と大きな溜息を吐きながら、一人の女性が眉をひそめている。

「そんなの『無理です』の一言で良いのよ? 真面目なんだから……」

「すみません、つい……」

「アナタは悪くないんだから、謝らなくて良いの。課長は櫻井さんと話したただけだから、何なら無視しても良いのよ?」

「む、無視はちょっと……」

「多分アレ、来月も同じように来るわね。はあ、めんどくさい……」

「判子、買いますか?」

「課長に買わせて持つてきてもらうわ。わざわざ経費を使う必要もないし。私が伝えておくから。櫻井さんは残りの精算書お願いね?」

「はい!」

さっきのしかめっ面とは打って変わって、今度はにこやかに女性は手を振って席を離れていった。「櫻井」と呼ばれた女性は、櫻井美緒みおといい、この会社の総務部の女性である。同じ会社に勤めており社長の御曹司ごうしである悠斗ゆうとと、ごくごく最近籍を入れたばかりの新婚だ。

人当たりも良く、何事にも一生懸命で仕事の評価も高く、上司、先輩、後輩、同期……と誰に評判を尋ねても、全方位から高評価な女性である。

悠斗の評判も相まって、結婚前は二人揃って『高嶺の花カップル』と呼ばれていた。お互い高スペック、そのうえ人当たりも良く悪い噂の一つもない二人は、他の人間たちから見ればまさに『高嶺の花』だった。

ここでいう『高嶺の花』は、あくまでも揶揄だ。なぜならば、悠斗が『社長の御曹司である』ということ、ほとんどの人が知らないからである。

悠斗は社長の息子であるという事実を、自社に入社してからも隠していた。それは、御曹司となれば、邪な気持ちを持って接してくる人間もいれば、勝手に妬む人間もいる。特に悠斗の父、現社長はそのことをよくよくわかっていた。だからこそ、悠斗には安易に口外しないよう口をつぐませ、自分も悠斗のことを特別扱いしなかった。もちろん、悠斗自身もその立場を振りかざすこともしなければ、結婚した美緒相手にもプロポーズのギリギリまでそのことを黙っていた。

「コホン。あー、櫻井さん？ 家庭で悩みとかない？」

美緒の隣に座っている男性が、コソコソと周りの様子を伺いながら声を掛ける。

「えっ？ いえ？ 特にないんですけど……？」

「そう？ ホラ、何か困ったことがあるとか、何でも良いんだけど」

「今は特に……」

「えっ……そうなのか……。じゃあ、ええつと……そうそう！ 旦那で何か悩みとかないの？ 夫婦の悩み！ 全然、俺話聞くからさ？ 食事でもどう？」

「……ご心配なく。いたって良好ですよ？」

「弓形さん？ 櫻井を食事に誘うなら、私が行きましようか？」

「えっ、あつ、いや、笹野さんは……良いかな……」

「はい？ どういう意味です？」

「やつ、何でも！ ……さあ、仕事仕事！」

弓形と呼ばれた男性は、アタフタしながらデスクへと向き直る。笹野——先ほど課長を追い払った女性が、同じように弓形を美緒から遠ざけた。

美緒が今回のように男性に誘われることは、独身時代においては日常茶飯事で、一人断つてもまた一人やってくるというように、絶えることはなかった。それは、恋人の有無も関係なく、だ。

結婚が決まってから、また結婚してからは多少の誘いは減ったものの、相変わらず二人で食事にどうにか行けないかと、何人もの男性がアタックしては撃沈を繰り返している。

「はあ……仕事、しづらくない？」

「はは……まあ、多少は……」

「ハッキリと断っても良いのよ?」

「今みたいに、『食事に行こう!』とか、『二人きりで云々』^{うんぬん}みたいに言われたら、まだ断りやすいんですけどね。それを出さずに匂わされると、自意識過剰なのかなって思っ
てしまつて……」

「真面目ねえ……。良いのよ、自意識過剰で。結局、大体当たってるんだから」

「あんまり、職場の方との関係性を悪くしたくないのもあつて……。でも、すみません。その分、笹野さんに迷惑をかけてしまつて……」

「良いのよそんなの! アレだったら、ウチの夫から注意させようか? 見た目、結構コワモテだし。それに一応、部長だし?」

「そんな……! 申し訳なさすぎます! 自分で何とかしますから……」

「できるなら良いんだけど……。ダメなら、私でも、旦那君でもちゃんと頼つてね?」

「はい、わかつてます」

笹野も職場結婚であり、総務部の部長をしている夫がいた。特に人事を主としており、笹野自身も総務部で係長をしているため、周りから見たらいろんな意味で強い夫婦と言えるだろう。

「あ、そういえば。旦那君、仕事新しく取れたみたいね。お客様から、別プロジェクトもウチにお願いしたいつて。営業部が騒いでたわ。すごいじゃない!」

「えへへ、ありがとうございます! 毎日頑張つてるんで、できるだけ家では、寛い^{くわい}でもらいたいですよね」

「……アナタ、本当に良い子だわ……」

そう言つて、笹野は美緒のデスクにチョコレートを置いた。

「アナタも、ちゃんと息抜きしなきゃダメよ?」

「はい! ……あつ、笹野さんこれ、新作のクッキーなんですけど。食べません?」

「これCMでやつてたやつじゃない! 気になつてたのよね、いたたくわ」

総務部は笹野夫婦を筆頭に、主任に美緒を置いていた。笹野もそうだが、美緒も主任という立場にあり、この会社ではまだまだ少ない役職持ちの女性の一人である。悠斗はまだ入社五年目であったが、異例の大出世を果たし、二十代という若さでシステム部の課長を務めていた。もちろん、その有能さ、この役職も含めての『高嶺の花カップル』の称号である。

社長の息子であるがゆえの異例の大出世……というわけでは決してなく、その人柄、仕事ぶり、能力を踏まえての課長という役職である。何も知らない周りから見たら、悠斗が普通の人間であれば何かおかしいと、そう感じるかもしれないくらい。

そう、悠斗は普通ではないのである。社長の息子という点がなかったとしても、悠斗は非常に有能な社員だった。その能力を埋もれさせないために、課長という役職が与え

られた側面もある。そして、その役職に就いてもおかしくない人間だと、悠斗は周りから評価されていた。異例の大出世という言葉は、他の社員たちからの最大限の誉め言葉でもあった。

（はあ……ちよつと疲れちゃったな。お手洗い行って休憩しよ……）

美緒は席を立つと、女子トイレへと向かった。手早く済ませた後、コーヒーを淹れるために給湯室へと向かう。

「……じゃ……？」

「よね！ ……る……！」

（あ……先客かな？）

こういつた時に、あまり人に話しかけることが得意ではない美緒は、給湯室の死角となる場所から女性たちがいなくなるのを黙って待つことにした。

（うう……できれば早くいなくなつてほしい……。無言になつちゃうのも何だか気まずいし……）

「……ねえねえ、聞いた？ システム部の櫻井さん、またお客さんからお仕事回してもらったんだって！ 営業じゃないのにすごくない!？」

「えっ、そうなの!? 今初めて聞いたけど、マジですごくじゃん!」

（……あれ？ ユウ君の話……）

さほど離れていない位置にいた美緒の耳に、悠斗の名前が届いた。

「見た目もイケメン、声もカッコイイし、仕事もできるって最高じゃない?」

「普段はちよつと怖いけどね。何か、無表情？ だし。忙しそうなのが顔とオーラに出てる」

「わかるー！ でも、そこが『できる男』って感じしない?」

「するする！ あと二人きりの時にすごい優しいとか甘えてくるとか、ギャップありそうー!」

「それ私も思った! 『全然人に興味ありません』って顔しながら、実は『好きな人にはベタ甘です』みたいな!」

（わお……ユウ君、めっちゃめっちゃ人気あるな……?）

美緒は苦笑いする。悠斗がこう言われていることは何となく知っていたが、実際に他人から言われている場面に遭遇すると、何とも言えない気持ちになった。

「髪型は清潔感ある感じだし、身長も……どれくらいだろ? 百七十は絶対超えてるじゃん?」

「あると思う! 笑った顔見たことある?」

「え、ない! ……笑うの?」

「何それ失礼じゃない? でも、見たことないんだ。私見たんだけど、ちよつとクシャッ

てなって、可愛い感じだった！」

「マジで羨ましいんですけど」

「眼福よ。スーツ着てるからわかんないけど、腕まくりしてる時、結構筋肉ついてるよ
うに見える？」

「わかる！ あれは細身だけど絶対筋肉ついてる」

「だよね？ スーツも似合うしカッコイイ」

「たまについてる寝癖、可愛いよね」

「わかる！」

（すごい……よく見てるな……）

話を聞けば聞くほど、それは悠斗だった。身長は百七十六センチあるし、暗めのトーンの髪色で、長すぎず短すぎずといった髪型だ。細身ではあるものの筋肉は適度についており、普段は難しそうな顔をしているが、たまに見せる笑顔は子どもみたいに可愛い。寝坊した時の髪型の優先度は低いため、ピョコンと毛先が跳ねている時も確かにある。

「えー、私彼女になりたい」

「えっ、ずるい！ 私も！」

「どんな人がタイプなんだろう？」

「聞いてみる？ 話すきっかけにもなるし良くない？」

「良いかも！」

（うわー……ごめんなさい、嫁がここにいます……）

思わず心の中で謝ると、美緒はコーヒーを諦め、バレないように部屋に戻ろうとした。

「あれ、二人とも知らねえの？ 櫻井さん結婚してんよ？」

（もう一人いた!?)

今度は男性の声がする。どうやら、女性二人、男性一人で給湯室を利用していたらしい。

「えっウソ！」

「いやいや、ホント。総務部の櫻井さん」

「……そういえば……同じ名字だな……とは思ってたけど……」

「櫻井さんって、毎月給与明細持ってきてくれる人だよね？」

「そうだよ。同じ大学で、最近結婚した」

「やだ、狙おうと思ってたのに！」

「私も……」

「盛り上がるくらいだから、知ってると思ったのになあ。意外」

「だって……たまに見かけて良いなって思ってたレベルだし……」

「入社してまだ私たち三ヵ月だし？」

「いや、俺も三ヵ月だけど」

「それは、アンタがシステム部だから知ってるんでしょ？ 私たち、どっちとも違う部署だし」

「そうそう」

「まあ、それもそっか。とにかく、諦めたほうが良いんじゃないかね？ どっちもファンクラブあるって噂だけだ」

（そうなの!?)

驚いた美緒は思わず出そうになった声を抑え、固唾かたすを飲んで給湯室の会話へ耳をすませた。

「女性社員の先輩に聞いてみたら？ あー、奥さんのほうは男性社員に聞くほうが良いかな？」

「……確かに、奥さんのほうは可愛い人だなと思った」

「入社式で司会してたよね。可愛いし、凛としてるって言葉がピッタリだと思ったもん」
（ひいああ……ありがとうございませ……!）

思わぬ言葉に、美緒は耳が赤くなる。同じ女性に褒められることが、嬉しくも恥ずかしくもあったからだ。

「奥さん、同じ女性から見てもそんな感じ？」

「まあねえ。可愛らしい人だと思うよ。多分、メイクでちょっと大人っぽく見せてるけ

ど、スッピンは幼いと思う」

「羨ましいよね、髪の毛サラサラだし、今の髪色も似合ってるし」

「目は大きいのに、他のパーツはちょっと小さくて、でも全然嫌味じゃないっていうか」

「あんな風に生まれたかったー」

「それね。隣にいと良い匂いするし」

「すれ違った時とかもわかるよね！ 華奢だし守ってあげたくなる感じ。私も身長百六十センチあるけど、気持ち目線下な気がする」

「あー、普段そうだよね、女の子らしいというか。入社式の時はスーツだったから、お姉さんっぽかったけど、シャツと柄物スカートだとイメージまた変わる」

美緒は思わず今着ている服を見た。大きな花柄の膝丈フレアスカートに、フリルとリボんタイのついたブラウス。髪色は最近染め直して暗めの落ち着いた色味にし、背中まである長さを生かして毛先もゆるゆるとカールさせた。少し下半身にお肉がついてきた気もするが、できるだけ学生時代の体重をキープできるようにも頑張っている。これだけ容姿を褒められると、面と向かって言われたわけでもなくとも、恥ずかしさが強くなった。

「仲間かよ」

「ウケる」

「仕事できて、可愛くて役職持ちで……それで人当たりまで良いとか、そりゃ彼女にしたいじゃん？ 年上お姉様とか最高」

「いやでも結婚してんでしょ？」

「じゃあ彼女は無理じゃん」

「結構ねえ……結婚してても良いっていう人多いんだよねえ……」

「ヤバイやつ！」

「ほんとそれ」

「ウチらによく『諦めたほうが良いんじゃないね？』なんて言えたよね」

「そっちのがよっぽどだよ」

「何だよ、思うくらい良いだろ？」

予想外の方向に話が進んでいき、慌てて美緒は止めていた足を動かすと、早足で部屋へと戻っていった。

（えっそうなの？ 結婚してる人に対して、みんなそんなこと考えたりするの？）

異性の社員に誘われることが多いとは、自分でも思っていた。だが、その中に『結婚していても良い』と思っている人がいるとは、考えていなかったのだ。あの男性社員の言う『結婚していても良い』は、おそらく『不倫になっても良い』『結婚していても付き合いたい』『あわよくば身体の関係だけでも』という意味合いが含まれているのだろう。

（……女の子たちも一緒なの……？ え、ウソ……。ユウ君、この話知ってるのかな……）

そう考えると、キュッと胸が締め付けられる。今まで考えていなかったことが、急に自分に対して牙を剥いたような気がして。

部屋に入る前に表情を作ると、美緒は残りの仕事を終わらせるべく、気を引き締めながらデスクへと向かった。

「……櫻井さん？ 怖い顔してるわよ？」

「え。そ、そうですか？」

「うん、とつても。何だか難しい顔してる」

「そう……ですかね」

「そうよ。だって、眉間に皺寄っているし」

「えっ」

笹野のその言葉に、美緒は思わず指で眉間を擦った。

「あはは、あのね、旦那君もそういう顔してる時あるわよ」

「ゆう……夫がですか？」

「たまにシステム部行く時に、パソコンに向かってる旦那君が目に入るのよ、入口のすぐ近くの席だしね。何かこう、パソコンとにらめっこしてるみたい」

「あっ……でも、確かに大学時代も授業中、ノート取りながら眉間に皺寄せてたかも……」

「そこが怖そうとか、オーラがどうのとか言われるのよね。人当たり良いのにね」

「……そっか、怖く見えるんだ……」

「特に、後輩から見るとそうらしいわよ」

「それは……ちよっと聞いた気がします……」

（そう、まさについさつき聞いたばかりだよ……）

心の中でそう呟くと、美緒は笹野にもらったチョココレートを一つ頬張った。

「それでも、人気よねえ」

「夫ですか？」

「そうそう。まあ、アナタもだから夫婦揃ってね」

「や、やめてください……」

「結婚するって知った人がどれくらい落胆したか知ってる？」

「し、知らないですよ……」

「ふふふ。まあ、そういうことは、知らないほうが良いかもしれないわね。大丈夫よ、

ほとんどの人が『ハイスベック同士すぎる！』って諦めたから」

「何ですかその理由……」

「相手もあの櫻井君だからね。勝てないって思ったんでしょ」

「そんな次元の違いお話みたいな言い方……」

「……櫻井さん、アナタ、自分で思ってるよりもずっとファンが多いのよ？」

「ファン……」

「そう、ファン」

「何だかそんな、アイドルみたいに……」

「ほほアイドルよ？ 男性社員なんか、みーんな陰で『美緒ちゃん』って呼んでるんだから。そんなに呼びたいなら、直接呼べば良いのにね？ 勇気がないんだからまったく」

ニコニコと笑いながら話すのが逆に怖い。美緒はそう思ったが、口には出さずにまだ残っていたチョココレートを一口で食べ切ると、その言葉と一緒に飲み込んだ。

定時になり、終業時刻を知らせるチャイムが会社中に鳴り響く。

「お疲れ様でした！」

「お疲れ様、また来週ね」

「はい！」

「良い週末を」

「笹野さんも」

「私は仕事が終わったら、旦那とデートなの」

「えっ、良いですね！」

「アナタたちもお互い忙しいかもしれないけど、たまにはお勧めよ」

そういえば、普段は単色でシンプルなネイルをしている笹野が、今日はラメやストーンのついたネイルをしてきていることに気が付いて、美緒は少し羨ましく感じていた。確かに言われてみればわかる。今日はいつものストレートヘアじゃない。……きつと、デートのために朝巻いてきたのだろう。それに、今まで気にならなかったが、いつもと違う香りがしている。

普段は爽やかな柑橘系の香りなのだが、今日は甘酸っぱいベリー系の香りがしていた。鼻をくすぐるこの香りに、今更ながら胸がキュンとする。好き嫌いはあるだろうが、きつと万人受けする香りだろう。同性でこれなのだ、おそらく男性であつたら、もつと胸にくるものがあるだろう。

ニッコリと笑ってヒラヒラと手を振る笹野に小さく頭を下げると、美緒は会社を後にした。

（今日は週末だからなあ。何か美味しいものが食べたいよね。『一週間お疲れ様でした！』みたいな、さ……）

さほど人通りも多くない道を、美緒は考え事をしながら歩く。平日、悠斗の帰りは遅い。だから、家事は美緒が一手に担っていた。代わりに悠斗は休日の家事を担当しており、現状これで上手く回っていて特に不満もなかった。

（とはいえ、たまにはやっぱり外食とかお惣菜も良いよねえ）

美緒は家に帰る前にスーパーへ寄ると、今日の晩御飯のメニューを考えながら買い物のカートを押した。この時間のスーパーは買い物客が多く、レジも混雑している。美緒のように仕事帰りに食材や惣菜を買っていく人間が多いからだろう。

「ああーっと、お醤油切らした気がする……ソースのメインだもんね、買わなきゃ。……あつ！ やった！ 今日ステーキ肉安いじゃん！」

美緒はステーキ肉を二枚手に取ると、カートの中に入れた。以前、一度和風ソースのステーキを作っており、悠斗も気に入った味だ。今回、それをまた作るつもりでいる。

（ユウ君、喜んでくれるかな？ へへ……）

——美緒の考えの中心は、悠斗でできている。

周囲は皆、悠斗と美緒が大学の同窓生であつたことは知っていた。が、実は高校から同級生だったのだ。当時から、美緒は悠斗のことが好きだった。美緒がどちらかといえば目立たないキャラで、比較のおとなしい女の子が集まったグループに所属していたのに対し、悠斗は放課後男女そろって遊びに行き、制服も着崩しているようなグループに属していた。

その中で明らかな派手さはなかったが、整った顔立ちで成績も良く、誰にでも分け隔てなく接する悠斗は、美緒の中でひときわ輝いて見えていた。……その時のことを、今でも美緒は覚えていた。だからこそ、同じ大学に進むとわかつた時、美緒は悠斗に振り

向いてもらえるように、気が付いてもらえるようにと、いわゆる『大学デビュー』を果たしていた。

元々可愛らしい顔立ちで、地味なほうとはいえ人当たりも良かった美緒は、多くの友人に囲まれながら、楽しくも忙しい日々を過ごしていた。そんな中、ずっと想っていた悠斗と偶然同じ授業を取ったことから、二人の運命の歯車が音を立てて動き始めた。

友人としての良好な関係を育み、時に衝突もし、悩みを抱えながら、美緒からの告白で付き合い始めた二人は、無事数年の恋人期間を経て、この度結婚という大きな節目へとゴールインしたのだ。

美緒は、周囲が思うよりも、悠斗が考えるよりも、ずっとずっと悠斗のことが好きだと自負していた。どちらかと言えばクールで感情の起伏が少ない悠斗は、あまり愛情表現を表には出さない。結婚を決めたのだからお互い好き合っているとわかってはいるものの、時々不安になることもあった。

普段、外でデートする時に手を繋ぐのは美緒からで、家にいる時に近くへ寄っていくのも美緒、恥ずかしいと思いつつも、抱き締めに行くのも、キスをねだるのも美緒からなのだ。

たまには必要としてほしい。愛されている実感が欲しい——そう思いはするものの、

口に出すことは憚られていた。もし、普段の温度差が本心から来ていたりしたら……？ そんな不安が心の中にあるからである。自分から付き合ってほしいと言った手前、惚れた弱みがあると美緒は思っていた。……例えその後、悠斗のほうからプロポーズを受けていたとしても。

とはいえ、悠斗から美緒を求めることもあった。察しのいい悠斗は美緒の変化に気付くのも早く、美緒の反応を楽しむように、からか揶揄いながら褒めることも多々あったのだ。当然、スキンシップをしたりすることも。ただ、それが美緒の求めている表現ではないというだけで。

——大好きな人と結婚することができただけで幸せ。

多くを望まないよう、心のどこかでブレーキを掛ける美緒は、それでも悠斗のためにと今日も彼のことを一番に考えながら過ごしていた。

(ユウ君イチゴ好きだし、今日のデザートはイチゴにしようかな？ ……わあ………久しぶりにお酒コーナー来たけど、このみかんのお酒、濃厚で美味しそう……)

せっかくの週末、美緒は悠斗にゆっくりしてもらいたいと考え、彼の大好きなイチゴと、自分も好きな果実酒を購入した。そしてステーキを食べ、イチゴを摘み、お酒を飲む悠斗を想像する。

きっと悠斗は、以前と同じように『美味しい』と言ってくれるだろう。そして『いつ

もありがとう』とも。悠斗は優しいのだ。周囲が思っているほど堅物でもなければ、人に興味が無いわけでもない。

——みんなが知らないだけなのだ。会社にいる時の悠斗の顔と、妻である美緒と一緒にいる時の彼の顔が違うことを。彼はクールなだけではない。それは美緒だけの特権で、美緒しか知ることのない顔なのだから。

(……いけない！ ユウ君のこと考えると、思わず顔がにやけちゃう……)

マスク越しに緩んだ口元を引き締めて、美緒は買い物再開した。

慣れた手つきで購入品をエコバッグに詰めると、急いで家路につく。悠斗がまだ帰ってこないとはいえ、やれること、やらなければならないことは早めに済ませてしまいたい。それが美緒の考えた。

休みの明日にまとめてやってしまえば良いかもしれないが、家事の担当は悠斗に代わる。自分の仕事を残して彼にやらせるつもりはない。それに、早く家事を済ませてしまえば自分の時間もできる。最近、刺繍にハマっていた美緒は、毎日家事を早めに済ませては、空いた時間で少しずつそれを嗜んでいた。

「ただいまー！」

誰もいない家に美緒の声が響き渡る。いないことはもちろんわかっている。が、それでも挨拶を欠かさないのが美緒だ。

買ってきた食材を手早く冷蔵庫にしまった後、部屋着に着替えて大きく伸びをする。

仕事で疲れた身体は硬かったが、もうひと踏ん張りりと大きな欠伸をしてからダイニングテーブルの木製ボウルに手を伸ばし、中にあつた小さなチョコレートを摘む。

「さあて。早速始めますか……」

そしてそれを頬張ると、宣言通り外に干していた洗濯物を取り込み始めた。

「虫はついていませんように……」

これでもか！ というくらいパタパタと洗濯物を叩きながら、どんどん部屋の中へと放り込んでいく。一度、冬に『もうこんな時期に虫はいないだろう』とタカを括ってそのまま取り込んでいたら、蜂が部屋の中に入り込んだことがあった。気が付いたのは畳んでいる時で、刺されなくて本当に良かった、むしろよく刺されなかったなど今でも思っている。悠斗がいたからことなきを得たものの、その場にいたのが自分一人だけだったら……と考えると、今でも怖くなるほどの出来事だった。

それから、季節関係なく洗濯物を取り込む時は、よくよく叩いてからにするようになった。虫嫌いな美緒は、もう経験したくないと思っていたからだ。本当は、明るい時間に取り込んで、しっかりと確認すべきなのかもしれないが、仕事がある日はそういうわけにもいかないのだ。

「やっぱり日に当たると、乾いた時の匂いが違うよねえ……」

部屋干しもする気はなかった。外で干して十分に日に当てられた洗濯物の、あの独特の匂いが好きだからだ。雨の日は別として、それ以外は特に外に干さない理由もないし、確かに虫は怖いができるだけ洗濯物は外に干したい。

そんなこだわりを持った美緒は、一緒に干していた布団を最後に取り込むと、寝室に運ぶついでにその柔らかな感触と匂いを求めて顔を埋めた。

「ううう……癒される……良い匂い……」

あまり人には見せられない姿だが、今は自分の家、ここには自分一人しかいない。存分に堪能すると綺麗に布団を整えてリビングへと戻る。

「さてさて。ちょっとだけ掃除機を……」

ハンディクリーナーを手にとると、床に落ちた埃や髪の毛が気になる箇所を掃除し始めた。気付かないように部屋の角にはよく溜まるものだ。夜なので静音のハンディクリーナーでも稼働させるのは少しにとどめ、換気をしてクリーナーから吐き出された空気が入れ替わるのを待つ。

「よし、完了！ ご飯の準備しなきゃ！」

ヴーヴヴ——ヴーヴヴ——

「……あっ、ユウ君！」

スマホがバイブ音を鳴らす。悠斗からのメッセージだ。

『今日は十九時には出られそう。週末だからみんな早く帰るって。俺も便乗する！ 仕事頼まれても断るし、出る時にまた連絡するから、もう少し待っててね。遅くなつてゴメン』

「やった！ 遅い……っていつても、今日は早いほうじゃん？ 嬉しいなあ……『はい。待ってるね』……と……」

忙しい悠斗の帰りはいつもは二十一時を過ぎることもザラだった。十九時に会社を出られるなんて随分早いじゃないか。思わず美緒の口元が緩んだ。

早く会いたい。一緒に住んでいるのだから毎日会えるが、それでも早く会いたい。できるだけ一緒にいたい。……何たって、悠斗は自分の『最推し』なのだから。

高校の時から、美緒はずっと『悠斗推し』である。ファンというわけではないが、どこか距離があつて、最初は一方的な片思いで。現実なのに現実から離れているような、夢を見ているような感覚がまだ拭えない。そんな状況も含めて、美緒は自分たちの関係をそう呼んでいた。

推しと結婚できた自分は、最上級に幸せなのだ、とも思っていた。

悠斗の宣言した、十九時を迎えるほぼピッタリの時刻にまた美緒のスマホが鳴った。今度は電話だ。

『もしもし——』

「——もしもし?」

『あ、美緒? 今良かった?』

「うん、ユウ君お疲れ様」

『ああ、お疲れ』

「もうそろそろ帰れそう?」

『うん、もうすぐ会社を出られそう。何か買っていくものある?』

「ううん、大丈夫だよ」

『そっか、じゃあまっすぐ帰ろうかな』

「うん、気を付けて帰ってきてね」

『はいはい。……あー、お腹空いた』

「今日はね、和風ソースのステーキだよ! 奮発した! ……わけじゃないけど。お肉が安くなってたから買っちゃった」

『おお! 楽しみ! すぐ帰る!』

『あははっ、気を付けてね?』

『大丈夫! じゃあ、駅着いたらまた連絡するから』

『はい』

『それじゃ』

「うん、後でね」

普段は電話での連絡はしないが、今日は早く帰れるから電話をくれたのだろうか。美緒には嬉しいことだった。なぜならば悠斗の声が聞けたからである。毎日律儀に帰宅連絡をくれる悠斗の行動は、料理を作る美緒にとって有難いものであり、かつコミュニケーションを怠ら^{おこた}ないことに対して愛情も感じていた。

……普段の愛情表現が薄いと感じつつも、その中で確かな愛情を探しているのである。「……よしっ、これでオーケー! お肉も柔らかくなるやり方見てやったし、ソースも前回のちゃんと再現できたし! 食感も併せて、絶対前回よりも美味しくなってるはず……! ユウ君、もう帰ってくるかな……!」

料理を作っている間に、悠斗からの連絡がきた。そのタイミングからして、そろそろ家に到着するはずだ。

——ガチャリ。

その時、ドアの鍵が開けられる音がした。

「——ただいまー!」

「あっ! お帰りなさい!」

パタパタと急ぎ足で玄関へと向かう。まるで父親の帰りを待っていた子どものように、美緒の顔は笑みで輝いていた。

「おかえりユウ君！」

「ただいま美緒。……おっと」

はしゃぐように抱きつく美緒を抱きとめ、悠斗は優しい笑顔でゆっくりと美緒の頭を撫でた。

「……ただいま」

「んんー……おかえりい……」

グリグリと悠斗の胸元に顔を押し付け、甘えたような声で返事をする。——今、悠斗に接している美緒は、会社で仕事をする美緒とは違う。それは、悠斗も同じだった。

「ほら、リビング行くよ？ 俺、まだ手も洗ってないし」

「……はあい」

上目遣いでチラリ、と悠斗を見る。やれやれ、といったような顔を見ると、悠斗はゆっくりと美緒に口づけた。

「……んっ……」

「……続きは後で、ね？」

そう言ってもう一度キスをする、美緒をリビングへと促した。

「わっ！ 電話の通りじゃん！ 俺これ好きだから嬉しい！」

「えへへ、良かったあ。良いお肉も買えたから、ソースも失敗しないように頑張ったん

だよ？」

「早く食べよう！」

悠斗が手を洗い、着替えをしてリビングへと戻る間、食事の準備を整えてダイニングテーブルへと並べる。温かい食事を悠斗に食べさせたいと思っている美緒は、できるだけ悠斗の帰宅時間に合わせて食事の準備を行っていた。毎回今日のようにピッタリ合うわけではないが、冷めていたら再び火を入れたり、最後の仕上げは悠斗が家に着いてから行ったりしている。

「それじゃあ、食べよっか？」

「うん、いただきます！」

「いただきます」

向かい合わせに座ると、丁寧に手を合わせた。

「あれ、このドレッシング新しいやつ？」

「そうそう。この間、福袋みたいなのが買ったら入ってたんだけど。にんじんのドレッシングなんだって」

「へえ、すりおろしっぱいね。初めて食べるよ」

「良い匂いすると思わない？」

「何か美味しそう。先に使って良い？」

「どうぞどうぞ」

綺麗なオレンジ色のドレッシングをサラダにかけ、野菜を口に頬張る悠斗の顔が綻ぶ。

「……んんっ……。これ美味しいね！」

「ホント？ 私も食べよ」

どうやら、先日購入したこのドレッシングは、大当たりだったらしい。悠斗も美緒も『美味しい』と言いながらあつという間に野菜を平らげた。

「……ステーキ、めちやめちや柔らかくない？」

「でしょ!? あのね、この間テレビでやってた、低温調理っていうのに挑戦してみたの！」
「肉汁たっぷりだし、すごい柔らかい。お店で食べるのよりも、下手したら美味しいんじゃない？」

「良かった！ 作った甲斐があるよ！」

スツとナイフの入る牛肉は、切ると中から肉汁が溢れた。引っ掛かりなく歯で噛み切れ、噛む度に肉の旨味が染み出してくる。

「ソースも美味しいよ。やっぱり、ステーキにこのソース合うなあ。……美緒は料理上手だね」

ニコニコと自分の作ったソースを褒める悠斗に、美緒は思わず顔を赤くした。褒められるということは何度あっても嬉しいが、何度あっても慣れないものだ。

「いやー、それほどでも」

照れ隠しに誤魔化すと、美緒もどんと肉を口へ運んでいった。

「——ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした！ あー、美味しかった！」

「おそまつさまでした」

「あ、洗い物俺やるから。美緒、先にお風呂入ってきたら？」

「良いの？ 疲れたでしょ？」

「良いよ良いよそれくらい。……あ。明日休みだし、一緒に入る？」

「えっ……た、たまには……入る……？」

「じゃあ、決定。洗い物終わったらすぐに行くから、先に入ってる」

「うん、わかった」

悠斗の申し出を受け入れると、着替えを持って浴室へと向かう。まさか、一緒に入るかと思われれるとは思っていなかった。が、そういえば最近是一緒に入っていたことを思い出し、思わず顔が綻んだ。誰か知り合いに今の顔を見られたら、『ニヤニヤして気持ち悪い』なんて言われてしまうかもしれない。こういうのを『浮かれている』と言うのだろう。

(……先に入ってるって、って言われたけど、いざ一緒に入ると妙に緊張しちゃう

な……)

まだ築年数の浅いこのマンションは、綺麗でそれなりに広いお風呂を備えていた。大人が二人で浸かっても、そこまでの狭さを感じない。水回りは清潔で綺麗なまま保ちたい、その考えが二人の間で一致していることもあり、お風呂やキッチンを始めとした水回りは掃除の回数も多く、家の中でも特に清潔さを保っていた。

脱衣所で着ていた服を脱ぐと、バスタオルの準備を二人分して浴室へと入る。扉を開けた時に抜ける白い空気が、独特の水の匂いを運んできた。入浴剤は今回特に入れていない。特に疲れた日、何か格別に良いことがあった日のために、楽しみはとつてある。

シャワーで軽く身体を流すと、まだ来ない悠斗を待つために先に髪の毛と身体を洗う。その間に入ってきたらどうしようか、と一瞬考えたが、おそらくまだ来ないだろうと判断した結果だ。いつものように好きなシャンプーの香りに包まれながら、もったりとした柔らかくも弾力のあるボディソープの泡に身体をくぐらせる。一日のすべてをリセットできる気がして、美緒はこのバスタイムが大好きだった。普段はゆっくりと一人でその時間を堪能するが、今日は違う。

コンコン――

「……美緒？ 入っても大丈夫か？」

ドアの向こうから、悠斗の声が聞こえた。

「あつ、ちょっと待って！」

美緒は慌てて全身に残った泡を流すと、湯船へと浸かる。

「大丈夫だよ！」

「じゃあ、入るよ」

ゴソゴソと音が聞こえる。きっと、悠斗が服を脱ぐ音だろう。少し経って、浴室のドアがゆつくりと開いた。

「あ、先に洗った？」

「うん。タイミングがわかんなかったから、先に洗っちゃった」

「ごめん、ついでに排水部分のゴミ受けるやつ、洗ってたからさ。遅くなっちゃったかも」

「全然。大丈夫！」

「あー……俺も中に入って良い？」

「え？ 良いよ？」

悠斗はさっと身体をシャワーで流すと、浴槽の端に移動した美緒の隣へと座った。

「お湯、増えたな」

「そりゃあ、大人が一人増えてるんだもん」

「わかってるけど、思ったより増えた。……俺、太ったかな？」

「そんなことないと思うけど？」

「ヤバいな、気を付けなきゃ。……誰かさんのご飯が美味しいから。つい食べ過ぎちゃう気がする」

「ええ!? もしかして私の原因!？」

「……冗談だよ。でも、今日のご飯も相変わらず美味しかった。いつもありがと」

「いえいえ、それほども」

浴室に反響する二人の声。不意に身体を動かすと、湯船に張られた水がチャポン、と音を立てた。

「……」

「……」

無言の時間が続く。急に恥ずかしくなり、美緒は何も言えないでいた。

「あ……俺、洗おうかな?」

「え、あつ、うん!」

ゆっくり入ろうかと思っていたが、悠斗は長い時間湯船に浸かることもなく、そそくさと髪を洗い始めた。いつも使っている悠斗のシャンプーの香りが広がる。

「新しいシャンプー買わないとなあ。なくなりそう」

「それ、気に入ってるんだっけ?」

「うん、結構ね。軋きまないし、匂いも良いし?」

「……ふふつ。ユウ君、女の子みたいなこと言ってる」

「そうかな? みんなそんなもんじゃない? やつぱりさ、人前が出る立場だし、匂いとか見た目とか気になるわけですよ」

「うーん、そっか……。それもそうだよね」

「あ、ドラッグストア行きたいから、付き合つて?」

「もちろん良いよ。……そうだ、時間があつたら、新しくできたカフェに寄りたいんだけど……」

「そのカフェどこ? 近くにドラッグストアあるなら、そこ目指していけば良いね」

他愛ない会話が広がる。身体を洗い終わった悠斗が再度湯船に浸かったが『暑い気がする……』と顔を真っ赤にして先に脱衣所へと出る。お風呂に入るのは好きなのに、なぜだかすぐに暑がつて湯船から出る悠斗を、美緒はくすりと笑って見送った。

(へへ……新しいヘアオイル、試しちゃおっかな?)

以前ドラッグストアに行った時、悠斗が好きだと言った蜂蜜レモンの香りのヘアオイルを、美緒はこっそり購入していた。何でも悠斗の気に入ったものを取り入れる美緒にとって、これも例外ではなかった。

(どうせなら、ユウ君に気に入ってもらいたいし? ……良い匂いって言われたいよね) 美緒も気に入った蜂蜜レモンの香りに囲まれながら、悠斗がこの匂いに気付いてくれ

るようオイルを丁寧な髪に染みこませると、一足先に爽やかで甘い美味しそうな香りを堪能していた。

「ユウ君、暑いのは落ち着いた?」

「おかえり……って、あれ?」

「ん? どうかした?」

「いや……何かこう、良い匂いがあるなと思って。嗅いだことがある気もするんだけど……。……おかしいな、シャンプー変えた?」

「わっ……ユウ君すごいね。ヘアオイル新しいの買ってみたの。……前にユウ君が『この匂い好き!』って言っていたやつなんだけど……」

「だからか! どこで嗅いだのか思い出せなかったけど、うん、俺の好きな匂い。……覚えてたの? 美緒」

「……うん」

「……もしかして、俺のため?」

「……うん……うん……」

ハッキリと自分の頭に浮かんだ言葉を口に出され、美緒は恥ずかしそうに俯うつむいた。悠斗のためにこのヘアオイルを買ったものの、本人に直接言われると気恥ずかしい。

「……はい、こっち座って?」

ニコリと笑い悠斗は美緒の手を取る。そのままソファへと誘い、自分が先に座ると膝の間へ美緒を座らせた。

「ゆ、ユウ君? 寝なくて良いの?」

「まだ良いの。……良い匂いしてる美緒が目の前にいるのに、勿体ないじゃん?」

「えっ……ええっ……」

「……この匂い、やっぱり好きだわ。……美緒がつけてると余計に良い匂いがある」

「ちよっ……へ、変な言い方しないでよ……」

「どうして? めちゃめちゃ良い匂いしてるよ?」

悠斗は美緒の髪の毛を少し指に絡めると、クンクンと匂いを嗅ぐ。

「やっ、ちよっ、匂い嗅がないでよ……」

「俺のためになんでしょ? 俺が匂い嗅がなきゃ」

「そう、なんだけと……うう……恥ずかしいんですけど……」

「美緒は気にしなくていいの」

「何だか変なニオイしてるみたいじゃん……」

「全然? ヘアオイルと、美緒の良い匂いがある」

「私の匂いって……」

「良い匂いだよ? 何かこう、甘い感じがする」

髪の毛だけでなく、悠斗は首筋へと顔を移す。そしてまた、クンクンと匂いを嗅ぐ仕草をした。

「ちよつ……まつ……」

「……え？」

「……っ……んんっ……」

思わず身体を引いた美緒の首筋に、悠斗は自分の唇を押し付けると、ペロリと舌で撫でた。

「待って待って……」

「美味しそうだったから、つい」

「ううう……」

「デザートなら良い？」

「デ、デザートならイチゴあるから！ ある！ イチゴ！」

「イチゴも良いけど、それよりも美緒のほうが良いかなあ？ そっちのほうが美味しそうじゃない？」

「ええっ!? すぐに！ 切るから！ デザート！ 食べよ！」

「……ふふっ。そんなに照れるの？ 可愛い」

「もう！ 遊ばないでよ……」

「ゴメンゴメン。じゃあ、イチゴ食べよっか」

「……切ってくるから、待っててね？」

少し不貞腐れたように口を真一文字に結ぶと、キッチンへと向かった。本当に怒っているわけではないと理解しているのか、悠斗はそんな美緒を嬉しそうに優しい表情で見つめていた。

「……あ！ ゴメン、美緒」

「どうしたの？」

「後輩に一通メール返さなきゃいけないから、ちよつとやってきても良い？」

「うん、良いよ？」

「食べたら寝ててくれて構わないから」

「でも……」

「気にしなくて良いよ、遅くなっちゃうかもしれないしね？」

「はあい……」

洗ってヘタを落としたイチゴを二つの器に盛りつけると、一つを悠斗の元へと運んだ。そして自分はリビングで手早く食べると、ソファへと座る。

「……うう……」

美緒は一人になったソファの上に寝転がると、何か言いたげにクッションに顔を埋

めた。

「ああもう……。可愛いのはユウ君のほうなんだもん……」

うつ伏せでジタバタと足を動かし、今起こったことを頭の中で反芻する。ためらいもなく、こんなことをするのが悠斗なのだ。この姿を、発言を、挙動を、誰が想像できようか。

「照れる、照れるけど嬉しい……。！ 複雑……。！」

悠斗のこのじゃれあいには、今に始まったことではない。付き合った当初から、美緒の前ではこのままだった。

髪型を変えれば必ず『可愛い』『似合う』と言い、新しい服にも気が付く。リップの色を変えれば『キスがしなくなる』と恥ずかしげもなく言い放ち『心配だから』と出先に迎えにも来てくれる。料理を作れば褒めてくれるし、その他細かいことを挙げればキリがないくらい、悠斗は美緒のことを思っていた。

だから美緒も『自分の好きな人にもっと好きになってもらいたい』『誰かに自慢できるような人間でいたい』と努力を怠らなかつた。

「……すごいなあ、やっぱり気付くんだ……。ユウ君の好きな匂いのやつにして良かった……。！」

胸が疼く。くすぐつたくて、顔が熱い。ニヤニヤと口元が緩むのを止めることもでき

ない。

「ユウ君……。会社では、後輩に恐れられてるのになあ……。誰もこんな姿、思い浮かばない……。よね？」

少しの優越感。『自分しか知らない』という事実が、美緒の心をくすぐり続けていた。

「はあ……。私のこんな姿、ユウ君にも会社の人にも見せらんないよ……」

スルスルと肌触りの良いソファカバーに足を滑らせ、疲れた身体をクッションとソファに委ねる。そして、頭を起こすためにテレビをつけた。週の仕事の最終日、いつものことではあるがすぐく疲れるのだ。正確には、『忘れていた疲れが押し寄せてくる』のだが、この日だけは『もう明日は休みなのだから』と、心も身体も油断するのか、気怠さから眠たくなるのが早かった。まだ今日という時間は残されているのに、身体と脳みそは早々に切り上げようとしている。

「うう……」

声に出すこともせず、美緒は『もう眠たい』『でも、ユウ君を待っていないなきゃ』『何か目を休めたい』『ううん、続きは後って……。ユウ君が言ってた……。』と、心の中で一人会話をしている。起きていなければという気持ちは強く、そのために頭の中では大きな声で話しているつもりだった。……。それでも、睡魔に襲われた身体は正直で、ゆつくりと力が抜けていった。

時間の感覚はわからない。時々聞こえるテレビの音が、辛うじて眠りかけの頭を現実
に呼び戻す。だがそれも長くは続かない。

「……」

もう完全に落ちる。誰かがその場にいたらきつと、そう思ったであろうその時。

「……美緒？」

「……ん……」

戻った悠斗が美緒に声を掛けた。

「あ、ゴメン。寝てたね」

「ん……んんう……だいたい、じょうぶ……」

「うそうそ。寝てたでしょ。遅くなっちゃったね、ゴメンね？」

「……ううん……ふあ……」

「ホラ、欠^{あくび}伸してる。歯磨いて、ベッド行こう？」

「……うん」

悠斗はゆつくりと美緒の身体を起こすと、その手を引いて一緒に洗面所へと向かい、
揃って歯を磨いた。

「ふう……あ……」

「……くくく……またそんな、大きな欠^{あくび}伸して……」

「明日お休みだと思ったら、気が抜けちゃって」

「気持ちわかるよ。俺もそう」

「眠たいって強いよね」

「それね。睡魔には勝てない」

「ゴメン……ちゃんと起きてようと思って、テレビもつけたんだけど……」

「別に良いよ？ 美緒の可愛い寝顔も見られたことだし？」

「や、やだもう……」

「ま、俺のほうが遅く寝る時と、早く起きる時は毎回見てるんだけどね」

「……そういうの、余計恥ずかしいんですけど……」

「え？ そう？」

「口元が笑ってるよ、ユウ君……わざとでしょ……」

「……ばれた？」

「もう！」

「いや、でも、可愛いのは事実だから。あと、見てるのも」

「……変態！」

こんなことは日常茶飯事だ。恥ずかしくなると美緒は、いつもそっぽを向いて悠斗か
ら離れていた。……ただの照れ隠しだ。何か言い返すことも、恥ずかしくてできない。

だからといって『可愛い』と言われたことに對して肯定もできないでいた。そんな美緒に対し、悠斗はいつも同じ反応をする。恥ずかしがってはいるもの、怒ってはいないはずだ、と考えた悠斗は、美緒の後を追いかける。

「……美緒？」

「……」

いつの間にか布団に潜り込んでいた美緒に声を掛ける。当の美緒は布団の中で、悠斗に背中を向ける形で目を閉じていた。しっかりと、悠斗の入れるスペースを隣に残して。悠斗は部屋の明かりを消して自分も布団へと入ると、背中から美緒を抱き締めた。

「……可愛い」

「……べ、別に可愛くないし……」

「可愛いよ？ 一番。俺の中では誰よりも」

「……そんなことないし」

「……うーん。美緒、自分が人気あるのわかってる？」

「……え？」

「会社だね。付き合ってる間も、結婚してからも、『美緒ちゃん可愛い』とか『付き合ってくれないかな』とか、『一緒にご飯行ってくれないかな』とか周りが言ってるからね。……俺の奥さんを気安く『美緒ちゃん』なんて呼んでほしくないんだけどね」

「そ、それはユウ君も一緒だよ……？」

「え、俺？」

「うん……。今日、給湯室のところで聞いちゃったんだよね。『カッコイイ』とか『彼女になりたい！』とか、新人の子たちが言ってるの」

「それ、ホントに俺の話？」

「そうだよ！ ……その場にシステム部の新人の男の子がいて、その子と他部署の女の子たちが喋喋ってるの聞いたら、間違いなくユウ君の話だったもん」

「はあ……。俺もそんな風に言われてるんだ」

「らしいよ。今日、笹野さん……。奥さんのほうね？ にも言われたんだけど。ファンクラブがあるとか何とか……」

「ふっ……。ふふっ……。！ 何だそれ。変なの」

「おかしいよね？」

「まあ、でも、美緒のファンクラブならわからなくてもないな。自分で気が付いてないだけで、システム部でも結構よく聞くからね。……みんな、旦那の俺がいるのに、よくもまああんなにあけすけに話すなと思うけど」

美緒は驚いた。悠斗も自分と同じように、全く知らないかと思っていたからだ。思わず回されていた悠斗の腕を外し、視線が合うように身体を動かす。そして、甘えるように

悠斗の胸に顔を埋めた。

「……知らなかったの、私だけ？」

「ファンクラブの話と、俺も何か言われているのは知らなかったよ。美緒の話は知ってた。……変に意識されたくないから、黙ってたけど」

「……ちょっとくらい教えてほしかったよ？」

「美緒は俺のなんだから、そんなこと気にしなくて良いの」

（うああ……何それ照れる……!）

美緒は口元が緩むのを抑えるために、真一文字に唇を結んだが、ピクピクと反応している。悠斗といえど『当然のことでしょ?』とでも言うように、真顔から表情を崩していない。実はこの時、悠斗は心の底からそう思っていたが、美緒はまた抑えられていると捉えていた。

「もしかしたら、他にも変な話出てきちゃうのかな……?」

「可能性はあるかもね。ま、無視して良いと思うけど。……あ、でも、誘いには乗るなよ? あわよくばと狙ってる人たちも多いだろうし」

「わかってるよ……。……ユウ君もね?」

「はいはい、わかってる」

「……ユウ君優しいから、困ってたら一緒にご飯とか行っちゃいそうだし」

立ち読みサンプル はここまで

「それは美緒のほうだと思うけど? 俺以外について行かないように。良いね?」

「……わかってるもん……」

「もしついて行ったら……俺のだってわかるまで……どうしてあげようかな?」

「ユウ君だって私のだもん!」

「俺はついて行かないよ? 美緒一筋だけ?」

「同じ! 私も! むしろ私のほうが好きだし! 絶対!」

「俺の気持ち、わかってないなあ。……まあ良いや。そういうことにしといてあげる」

「ええ……何それえ……」

「別に? ……ところで美緒」

「何?」

「目、覚めてきた?」

「……あ、う、うん。ちょっと、ね」

「じゃあ、さっきの続き」

「……え?」

「こっち、向いて?」

悠斗の言葉に美緒は顔を上げる。暗闇に慣れた目には、しっかりと悠斗の顔が映っていた。もちろん、悠斗の目には美緒の顔が映っている。